



## 画一化と分極化

東洋大学講師 船崎 武男

ゴールデンウィークを利用して、久しぶりの帰省をした。昔の職場仲間から観桜会に誘われたのが、直接の動機であった。

長野で飯山線に乗りかえると、沿線一帯は、車窓からあふれるばかりに、真白なりんごの花盛りであった。その間を縫うようにして進む千曲川の溪流、それらを抱えこむように峰を連ねる山々、そこには、幼いころに慣れ親しみ長じて大陸の戦野から遙かに思いをさせ、そして今なお、折に触れて脳裏に描く故郷の山河が、紛れもない現実の姿として存在した。

列車が目的地に到着した。駅頭を一步踏み出した私は、我が故郷の思いがけない違った表情を再発見した。つい先刻、車窓から見たのは虚像だったのであろうか。目のあたりにする光景は、あまりにもリアルで、少なからず幻滅をもたらすものであった。そこには、りんご園が伐られ、ガンギ造りの家が壊されて、現代建築が出現していた。

肝心のお花見は、幹事の思惑に反して、桜前線が一足先に通り過ぎたため、文字どおり後の祭りとなったが、懇親会は殊のほか盛会であった。地元に住む者は兎も角、5年振りの催しに参加した私には、30数年前の職場での出来事は、まさに往事茫茫であったが、それでもアルコールが回るにつれて、記憶の断片の幾つかが、鮮かに蘇ってきた。そして、お互いに過ぎし日を語り、近況を告げ、この席に顔を見せない誰、彼の消息を交換し合った。

ところが、そうした雰囲気の中で、私はフト奇妙な違和感が付きまとっていることに気が付いた。それは、かつて私自身が日常口にし、昔仲間の人達は今も当然使っているものと独り決めこんでいた、この地方独特の方言が、今や全く影を潜めていることであった。そういえば、毎日の通勤で通る上野駅の人混みの中にも、めったに地方なまりを耳にすることが出来なくなってから、すでに久しい。それも、これも、大宅壮一氏をして「一億総白痴化運動」と評せしめた、尊大な放送文化が、日本全国の方言地図を、ただ一色に塗りつぶす勢いで、広く深く浸透したことの成果であろうか。

かくして、つかの間の滞在中に見た郷土の姿は、最近の地域社会一般に見られる共通的な傾向をそのままに、ひたすら生活様式の全国的画一化への歩みを続けているものようであった。そして、そのことはまた、次のような素朴な疑問と、一抹の淋しさを感じさせるものでもあった。

個性を失った地域社会、それは現にそこに住む人達にとっては、“マイタウン”になり得るとしても、そこを巣立った者の“ふるさと”にはなり難いのではないか。これからの“ふるさと”は、各人の心の中にしか存在し得なくなるのではなからうか。

\* \* \* \*

帰りの信越線は、予想どおりガラ空きであった。窓外の景色が夕闇の中にとけこんでしまった車内で、いつしか私は郷里で受けた印象のうえに、最近の統計界でのある出来事を重ねて見ていた。

それは、昨年度全国統計協会連合会が行った「統計調査等の報告負担の軽減に関する調査研究」（委員長：竹内東大教授）の委員をして経験した幾つかの事柄であった。

この研究の中の重要な一環として、東証上場企業に対するアンケート調査と中小企業に対する面接調査とが行われた。カバンから取り出した報告書をめくりながら、改めて両調査の結果を比べて見ると、幾つかの興味のある事実が分かった。

例えば、「調査の重複排除のため官公庁間で情報を融通し合うこと」については、上場企業（本社）の91%、中小企業の60%が肯定的な回答を寄せ、「定期調査のための企業と官公庁間のオンライン化」については、それぞれ26.7%、40.7%が肯定的な回答を寄せている。中小企業の回答の中には、傍観者の立場でのものも含まれている可能性があるにしても、情報化社会を意識しての画一化志向の現れといえそうである。

一方、統計調査についての負担感、必要性、結果の還元等については、上場企業側では現状に対する批判的な回答が比較的多かったのに対し、中小企業では、これらを問題視する回答が比較的少なく、企業規模による分極化現象が感じられた。

画一化と分極化、私の郷里でも、注意深く観察すれば、重大な分極化現象があったのに違いない。更に、それらの全体を通じていえるのは、社会が時々刻々変貌を遂げつつあるということであろう。統計の仕事をしていると、往々にして平均値のみに眼を奪われ勝ちであるが、統計集団の構造や、その変化についての配慮も極めて重要であることを、改めて痛感した次第である。

## 昭和58年度に実施される主な統計調査の概要……………

統計課が所掌している各種統計調査には、国の委託統計調査が31調査、また県の単独調査が37調査の総数68調査を数えます。

そのなかで、昭和58年度に実施される統計調査を体系的にみると、国の委託統計調査は、労働・賃金2、農林水産1、鉱工業2、建設・土地1、商業・サービス4、資源エネルギー2、企業・経営2、家計・物価4、福祉・衛生1、教育・文化1の20調査で、県の単独調査は人口1、企業・経営1、家計・物価2の4調査で、国及び県調査を合わせ

ると総数24の統計調査を実施します。

そのほか、地方公共団体の行政施策や民間企業における地域経済分析の指針として、利便性、即応性を考えて各種統計を指標化した加工統計があります。

ここに、これらの統計が、調査結果と分析結果の早期還元という観点から、どのような名称の刊行物がいつ頃公表されるのかを主眼として具体的に整理しましたので、統計調査の結果利用の際の参考としていただければ幸いです。

(統計課・統計指導グループ)

### 昭和58年度に実施される主な統計調査の概要

#### 1. 国の委託統計調査

名 称	公 表		調 査 目 的	調 査 対 象	調 査 期 日 及び周期
	期 日	刊 行 物 名			
人 口 住民基本台帳人口移動報告	季報 3ヶ月後 年報 59.6	住民基本台帳人口移動報告季報 住民基本台帳人口移動報告年報	住民基本台帳により人口の移動状況を明らかにする	住民基本台帳に記載した者	四半期毎
労働・賃金 労働力調査	月報 翌々月末 年報 59.3末	労働力調査報告 労働力調査年報	就業及び不就業の状態をとらえる	世 帯	毎 月
毎月勤労統計調査	3.加工統計 県——の雇用、賃金指数参照 国——月報、翌々月 年報59.10末	3.加工統計の雇用、賃金指数参照 毎月勤労統計調査報告 毎月勤労統計調査報告	雇用、給与、労働時間の変動をとらえる	事業所 (農林水産業を除く)	毎 月
農林・水産 漁業センサス	60.3末	第7次漁業センサス結果報告書	漁業の実態をとらえる	漁業経営体、 漁業従事者世帯	58.11.1 (5年毎)
鉱 工 業 工業統計調査	県——59.10末 国——60.6末	茨城の工業 工業統計表	工業の実態をとらえる	製造業事業所	58.12.31 (毎 年)
通商産業省生産動態 統計調査	月報 3ヶ月後末	業種別月報	鉱工業生産の実態をとらえる	指定製品の製造事業所	毎 月
建設・土地 住宅統計調査	59.10末	住宅統計調査報告書	住宅の現況と住宅事情をとらえる	住 宅 (世 帯)	58.10.1 (5年毎)
商業・サービス 商業動態統計調査	月報 3ヶ月後末 年報 59.8末	商業動態統計月報 商業動態統計年報	商業活動の実態をとらえる	卸売業、小売 業事業所	毎 月
特定サービス産業実 態調査	59.8	特定サービス産業実態 調査報告書	特定サービス産業の事業活動の実態の現状をとらえる	情報サービス業、物品賃貸業、 広告業等を営む事業所	58.11.1 (毎 年)

……………公表予定期日および公表刊行物名一覧

[表つづき]

名 称	公 表		調 査 目 的	調 査 対 象	調査期日 及び周期
	期 日	刊 行 物 名			
繊維流通統計調査	月報 3ヶ月後 年報 59.11	業種別月報 繊維統計年報	繊維原料及び繊維製品の流通をとらえる	繊維原料, 繊維製品を扱う卸売業者	毎 月
機械器具流通統計調査	月報 3ヶ月後 年報 59.11	業種別月報 機械器具年報	機械器具の流通の実態をとらえる	家庭用電機器具等を扱う卸売業者	毎 月
資源エネルギー 商鉱工業エネルギー 消費構造統計調査	59.11末 (速報) 60.3末 (確報)	商鉱工業エネルギー消費統計表	商鉱工業におけるエネルギー消費の実態及び動向をとらえる	卸売業, 小売業, 鉱業, 製造業事業所	58.12.31 (毎 年)
商鉱工業エネルギー 消費動態統計調査	59.8	商鉱工業エネルギー消費統計表	商鉱工業におけるエネルギー消費の毎月の実態をとらえる	指定製品の製造事業所のうち特定事業所	毎 月
企業・経営 法人企業投資動向調査	季報 翌々月中旬	法人企業投資動向調査報告	法人企業の投資実態をとらえる	法人企業	58.5.8. 11 59.2
個人企業経済調査	季報 翌々月中旬 年報 59.8	個人企業経済調査季報 個人企業経済調査年報	商工業とサービス業を営む個人企業経営の実態をとらえる	個人企業	毎 月 (但し, 資産及び負債については3月末)
家計・物価 家計調査	月報 3ヶ月後 中旬 年報 59.10末	家計調査報告 家計調査報告年報	家計収支の実態をとらえる	世 帯	毎 月
貯蓄動向調査	59.7末	貯蓄動向調査結果報告	世帯における貯蓄, 負債投資の動向をとらえる	世 帯	58.12.31 (毎 年)
消費動向調査	季報 2ヶ月後 年報 59.11末	消費動向調査結果 消費動向調査年報	消費者の意識の変化等を迅速には握し景気の動向判断の基礎資料とする	世 帯	58.6.9. 12 59.3 (毎 年)
小売物価統計調査	3.加工統計 県——の消費者物 価指数参照 国——月報翌々月末 年報59.7末	3.加工統計の消費者 物価指数参照 小売物価統計調査報告 小売物価統計調査年報	商品の小売価格とサービス料金等をとらえる	小売店舗 世 帯 等	毎 月
福祉・衛生 学校保健統計調査	59.2 60.4	学校保健統計調査速報 学校保健統計調査報告書	幼児・児童・生徒の発育や健康状態をとらえる	学 校	58.4~6 (毎 年)
教育・文化 学校基本調査	県——58.12 国——58.8 59.5	茨城の学校統計 学校基本調査結果速報 学校基本調査報告書	学校に関する基本的事項をとらえる	学 校 教育委員会	58.5.1 (毎 年)

(注) 公表欄のうち県・国別が明記されていないものはすべて国のみ公表とする。

2. 県の単独調査

名 称	公 表		調 査 目 的	調 査 対 象	調 査 期 日 及 び 周 期
	期 日	刊 行 物 名			
人 口 茨城県常住人口調査	月報 翌月10日 季報 翌月10日 (1.4.7.10月) 年報 翌年3月末	茨城県の人口と世帯 (推計) 茨城県の人口(年齢別) 茨城県の人口	国勢調査の間における 市町村ごとの人口及び 世帯の移動状況を明らか にする	住民基本台帳 に記載、または 削除した者及び 外国人登録原票に 登録申請または 登録証明書を返 納した者	毎 月
企業・経営 茨城県事業所経済調査	59.3末	茨城県事業所経済調査 結果報告書	事業所の営業活動の状 況をとらえる	農林漁業、鉱 業、建設業、 製造業、卸・ 小売業等	58.8 (毎 年)
家計・物価 茨城県消費実態調査	59.6末	茨城県消費実態調査結 果報告書	消費生活の実態をとら える	世 帯	58.9 (毎 年)
茨城県消費者物価調査	3.加工統計の消費 者物価指数参照	3.加工統計の消費者 物価指数参照	商品の小売価格とサー ビス料金等をとらえる	小売店舗 世帯等	毎 月

3. 加工統計

名 称	公 表		調 査 目 的	調 査 対 象	調 査 期 日 及 び 周 期
	期 日	刊 行 物 名			
県民所得統計	58.9末	県民所得	経済活動の実態やその 結果を総合的にとらえる	—	—
産業連関表	59.3末	茨城県産業連関表	一定の地域で、一定の 期間に行われた財貨・ サービスの産業相互間 の取引を総合的にとら える	—	—
鉱工業指数	月報 翌々月末 年報 59.5末	茨城県鉱工業指数 茨城県鉱工業指数	鉱工業(生産、出荷、在 庫)の動向をとらえる	—	—
消費者物価指数	月報 当月末 月報 翌月末 年報 59.4末	水戸市消費者物価指数 (速報) 茨城県消費者物価指数 (確報) 茨城県消費者物価指数	消費者物価の変動を時 系列的に測定して、物 価の動向をとらえる	—	—
雇用、賃金指数	月報 翌々月 年報 59.8	茨城県の賃金、労働時 間、雇用の動き 茨城県の賃金、労働時 間、雇用の動き	茨城県における毎月の 雇用、給与、労働時間 等の変動をとらえる	—	—
茨城県社会生活統計 指標	59.4	茨城県社会生活統計指標	県民生活全般にわたる 実態を各種統計から体 系的に収集、編成し県 民福祉向上の基礎資料 を得る	—	—

4. その他の統計(刊行物関係)

名 称	公 表 期 日	内 容
統計年鑑	59.3	茨城県の全貌を網羅した唯一の総合統計書
県勢要覧	59.3	県勢の概要を統計でみる資料豊富なコンパクト統計書
都道府県勢の展望	58.9	各行政項目ごとに、全国の中の本県の地位を明らかにした統計書
茨城県のすがた	59.3	一目でわかる茨城のカラー全県地図、主要統計グラフ等
統計いばらき(月刊)	毎月1日	統計情報月刊誌

## 講師の評価

総理府統計研修所  
研修レポートから

私は、全国各地の各組織(国, 県, 市町村, 3公社等)から集まった50余名の仲間とともに、1月中旬から2月下旬までの5週間、総理府統計研修所の専科基礎課程A<sub>2</sub>(分析)コースを受講して来ました。

講義内容を一部紹介しますと、記述統計(28単元, 1単元は90分), 推測統計(同16), データ解析実習(同16), 多次元データの解析(同12)となっており、講義合計12科目, 112単元, 他に補講19回(1回60分)と豊富な、しかも、ボリュームのある研修でした。

当初、数学の苦手な私は、講義についていけるかどうか不安でしたが、研修開始早々数学の試験があり、それにより理解力をみ、補講を行い、次いで講義があり、更に講義の中に演習を取り入れ、最後に実習があるといったステップを踏んだ研修方式をとっていることや、研修生相互の助け合い、更に電卓等のお陰をもちまして、どうにか終了までこぎ着けた次第です。

ただ、内容の理解という点では、講義が非常に早いテンポで進んだことと、当人の能力不足ということもあり、いま一步の感じです。

研修生活は、20余名の専科生と統計研修所の「統友寮」に入所したことに始まり、私は九州農政局の佐賀統計情報事務所の方と同室になりました。

寮には本科生(6ヵ月研修受講者)という先住の民がおりまして、早速、この方達と管理人の高橋さんが歓迎の宴を設けてくれまして、それから送別の宴に至るまで、誕生会、帰朝報告会、学習会……といった名目で集い合い、郷里、職場、新宿や渋谷の盛り場探訪、うわさ話し?……をつまみ替わりに酒を飲み、講義の疲れ?を吹き飛ばし、暫しの安堵感を味わったものでした。

統友寮専科生で作成していました新聞「サンメンション」第4号の「講師の評価」の記事を紹介して、研修報告のめといたします。

### さんめんしょん<sup>2</sup> 企画特別調査

講師の担当科目の相違、時間数の多寡等の問題があり、アンケートの結果をそのまま利用することに多少の問題があることを踏まえて読まれたい。なお、設問⑧「演習が良かった」は、設問不適当につき分析対象から除外しました。

## フナマン ギンギラ熱意で—— 人気独占

表一 総合評価(原点数)

講師名(仮名)	算術平均 <sup>(10点満点)</sup>	変動係数
フナマン	8.4点	0.20
フナマン Jr.	6.1	0.29
メッシュ	5.5	0.34
20面体	5.2	0.32
あのみあー	4.5	0.49
どぜう	4.1	0.38

■総合評価(原点数)をみると、フナマンが10点満点で平均8.4点を獲得し、しかも、変動係数(注1)0.20と衆目の一致した評価を集め、他を圧倒する人気をみせたのであった。

あのみあーは平均で4.5点と5点に満たなかったが、変動係数0.49と人により評価がかなり異なる傾向を示している。

表二 項目別評価の最高得点くらべ  
(私のセールスポイント)(原点数)

区分	最高得点項目	点数 <sup>(105点満点)</sup>
フナマン Jr.	熱意, ヤル気	85点
メッシュ	よく眠ることができた	75
20面体	内容がやさしかった	79
あのみあー	よく眠ることができた	97
フナマン	熱意, ヤル気	102
どぜう	よく眠ることができた	77

注) 1. 項目別評価の設問数は11項目です。

■項目別評価(原点数)の最高得点をみると、フナマンが熱意, ヤル気部門で断トツの102点を獲得、フナマン Jr. が同部門で比較的高得点の85点を得た。あのみあーはよく眠ることができた部門で抜群の97点を獲得し、彼の他の部門での成績が満点の半分未満であった中で異色の部門となった。

# ▶ 研修レポート

## 高得点と低得点のそれぞれの共通因子

表一3 点数の対応

(単位:点)

区 分		点 数 の 対 応									
総合評価	原 点 数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	↓ 変換点数	-2.5	-2	-1.5	-1	-0.5	0.5	1	1.5	2	2.5
項目別評価	原 点 数	1	2	3	4	5					
	↓ 変換点数	-2	-1	0	1	2					

■表一4をみると、総合評価がプラスだったのは、フナマン、フナマンJr.の2人だけであった。そこで2人の共通因子を項目別評価でみると、

- ① 熱意・ヤル気があった!
- ② 教え方に工夫がみられた!
- ③ 内容が難しかった  
(高得点の理由にはならない。)

以上の3つであった。

■更に、総合評価がマイナスだった4人のうち特に低得点だったとせう、あのまあーの2人だけに絞って共通因子を探すと、上記のほかに、

- ① 将来役に立たない
- ② 興味がない
- ③ 仕事に直結しない

- ④ 熱意、ヤル気がない

以上の4つであった。

表一4 得点状況(変換点数)

(単位:点)

区 分		フナマンJr.	メッシュ	20 面 体	あのみあー	フナマン	ど ぜ う
総 合 評 価		1.5	- 5.5	- 8.0	-16.0	25.0	-20.0
項 目 別 評 価	① 熱意・ヤル気	22	3	0	-18	39	-12
	② 科目と仕事の直結度	-28	5	- 1	-24	3	- 8
	③ 興味ある科目だった	-11	7	-14	-18	14	-21
	④ 研究心をそそられた	-19	- 4	-20	-24	3	-27
	⑤ 口調	0	-11	- 9	-14	24	-21
	⑥ ユーモア度	- 2	-25	-15	-11	9	-28
	⑦ 内容の難易度	-38	1	16	-26	-10	12
	⑧ 教え方に工夫がみられた	7	-27	-16	-31	30	-23
	⑩ 将来役に立ちそうだ	-15	1	-13	-26	11	-19
	⑪ 説明がわかりやすかった	-17	- 8	- 1	-23	2	-10
	⑫ よく眠ることができた	10	12	3	34	-38	14

注) 1. アンケートの評価点(原点数)を表一3のように変換し、更に、これをサンプル数(21名)分合計してこの結果を得ました。

■総合評価がマイナスだったのは他の4人であり、彼らの共通因子をみると、

- ① 教え方に工夫がみられない!
- ② ユーモアがない!
- ③ 研究心をそそられなかった
- ④ 口調が気に入らない
- ⑤ 説明がわかりにくかった
- ⑥ よく眠ることができた

→眠らせると、  
人気が出ないのだ!

以上の6つであった。

## 相関係数の大変化

■ここで、特に得点状況の似ていたフナマン、フナマンJr.の2人の相関係数に着目すると(表一5参照)、相関係数(注2)は0.35と低い値になったが、グラフ化すると驚くべきことに図一1のようになった。

つまり、特異点である設問⑫「よく眠ること

表一五 項目別評価得点の相関行列

区 分	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)
フナマンJr. (A)	1.00					
メッシュ (B)	-0.18	1.00				
20 面 体 (C)	-0.25	0.47	1.00			
あのみあー (D)	0.43	0.38	0.23	1.00		
フナマン (E)	0.35	-0.46	-0.43	-0.65	1.00	
ど ぜ う (F)	0.59	0.59	0.91	0.50	-0.69	1.00

注1)

$$cv = \frac{\sigma}{\bar{x}}$$

$$\sigma = \sqrt{\frac{1}{N} \sum (x - \bar{x})^2}$$

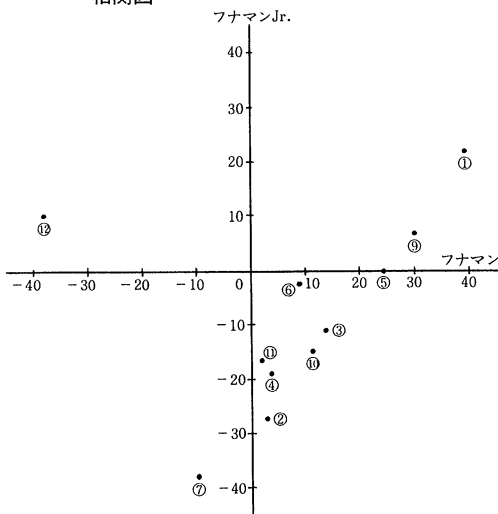
$$\bar{x} = \frac{1}{N} \sum x$$

変動係数の性質

○変動係数の小さい集団の方が変動係数の大きい集団より個々のデータが平均に近いものの集まりである。

ができた」のいたずらで相関係数が低い値に留まっていることがわかった。そこで、設問⑩を除外して相関係数を求めてみると、実に驚くべきことに相関係数は0.95となったのであります。

図一 一 フナマンとフナマンJr.の項目別評価得点の相関図



○短期的にみると変動係数は不変で1つの構造変数とみなされる。この値は時の経過とともに、一般に、徐々に変わっていくと考えてよい。

注2)

$$\text{相 関 係 数} \quad r = \frac{\sigma_{xy}}{\sigma_x \cdot \sigma_y}$$

$$\text{共 分 散} \quad \sigma_{xy} = \frac{1}{N} \sum (x - \bar{x})(y - \bar{y})$$

$$x \text{ の標準偏差} \quad \sigma_x = \sqrt{\frac{1}{N} \sum (x - \bar{x})^2}$$

$$y \text{ の } \quad \sigma_y = \sqrt{\frac{1}{N} \sum (y - \bar{y})^2}$$

相関係数の性質

○2つの変数の相関関係の方向と強さを示す尺度であり、以下の性質を持っている。

相関係数  $r$  の変域は  $-1 < r < +1$  である。

$r = \pm 1$  のとき 完全相関

$r = 0$  のとき 無相関

$r > 0$  のとき 正の相関

$r < 0$  のとき 負の相関 という。

【筆者後記】

研修レポートを書くに当たり、有益な助言とともに資料等の提供をしてくださった九州農政局佐賀統計情報事務所の小松氏に心から謝意を表したい。

(統計課・企画分析グループ 大籠広幸)

ここがポイント!

要するに、フナマンの「グラフ化は、データ解析の事始め」と、フナマンJr.の「相関係数、その他の統計的数字は鵜呑みにはできない」の原則が見事にあてはまったのです。



## あるハプニングの回想……………

去る1月26、27の両日にわたって昭和57年度の統計グラフ指導者講習会が東京の赤坂公会堂で行われた。全国から参加された受講者が230余名で盛会だった情況もさることながら、筆者の記したいことは、20数年前(30年代の初期)に同じこの公会堂であったハプニングでの思い出なのである。

現在、地下鉄の赤坂見附駅から徒歩数分の公会堂への道筋は、白亜の超高層ホテルやモダンなオフィスと店舗がたちならぶ都内でも指おりの町並に変貌をとげたが、やがてその一角に現われてきた目的の公会堂は、ペンキや壁の塗り替え程度の旧態依然とした姿のままだった。内部も20余年前と変わりが無いので、過ぎし日に起きたあの事件の情景が目前に彷彿(ほうふつ)と浮んでくるのだった――。

昭和30年代の初めといえば、その後わが国が迎える高度経済成長期にはまだ遠く、まだ敗戦後の混迷が続く社会の中で、国民の間には新しい時代への期待や模索、それが容易に実現されない社会的不平不満がうっ積し、街頭には次々と大規模なデモ行進があり、上司や権力者に対する集団交渉やツルシ上げなどが日常茶飯事だった頃であった。20数年前に公会堂へ集合した受講者は勿論、講師もこうした時代の子であったのだ。若い世代の人たちに時代背景を若干記したが、あの日のハプニングへベンを進めよう。

ハプニングで会場内が息づまるような空気になった直接の原因は、この講習会で初めて行われた〈パネル・ディスカッション〉が発火点だったのだ。その年度のグラフ全国コンクール入選作品中から何点かを選び、それを前にして講師(審査員でもあった複数)と受講者間で批評や意見を交換する自由討議の形式である。対象となる作品の順序は、小中学生のものから始めて一般に及ぶ、というかたちをとった。討議は始めから熱気をおび、双方の意見が一致する場合もあったが、些細な喰いちがいから感情的になり、激しい言葉で応酬する場面が次第に増えてくるのだった。それが最高調に達したのは、最後の一般からの応募作品中の一点が登場した時であった。

その作品は九州某県の一公務員(?)の作になるもので、内容は敗戦後の外地からの内地復員者と未復員者数を扱い、それは当時の国民がよせる強い関心事の一つでもあったのだ。グラフそのものの表現にはさした難点もない単純なものだが、それを補い観者の注目を惹きたい意図からだろう、

図面には復員者の帰還を待ちわびる“岸壁の母”らしいイラストが配され、作品に付けられた題名がまた、そうした意図による感情と主観で綴られていた。

この時、講師側から作品の前へ歩みより、感想をおだやかな調子で述べはじめられたのが美濃部亮吉先生だったのである。戦後の混迷期を通じて行政管理庁の統計基準局長をながらく務めておられ、統計知識の普及と表現技術向上のため全国的なグラフ・コンクールや指導者講習会などの創始者でもあった美濃部先生は、後進の後藤正夫氏(後に大分大学々長、参議院議員)に職をゆずられ、教育大学の教授になられてから間もない頃で、コンクールの審査員の一人としてその日も気軽に出席されていたのだ(記すまでもないが、先生はその後東京都の革新知事として三選もされ、社会福祉行政に大きな業績を残された。現参議院議員)。

ハプニングに口火を切った先生の第一声は、

「わたくしには、このグラフの題名が感情的でオーバー過ぎるようにおもわれ、抵抗を感じるのです。統計の伝達に主観的感情は排除すべきです……」という、如何にも学者らしい言葉だったが、これに応じるように、前列近くにいた一青年が直ぐ立ちあがり、九州なまりのある大声で、

「先生の意見に僕は反対です。この題名には、復員軍人やそれを待ちわびている人びとの労苦や心苦に対する国民的感情が強くこめられており、見る人に訴える力が大きいので、これで良いのだと思います。僕の意見に賛成者は多いとおもう……」と、こぶしさえ振り上げながら先生に挑戦した。すると、これに応じるように受講者席のあちこちから、「そうだ、そのとおりだ、君の意見に賛成」の言葉があがり、支持者多数を得た先の青年は自信ありげに質問するのだった。

「国民的感情や願いを表現した題名がなぜ悪いのか、納得のいく説明を望みたい！」と指さされた先生は、やや表情を固くされて、

「統計の扱いには、常に客観的冷静さが大切です。したがって、題名にも、主観や感情的誇張はつつしむべきだと考えます。それは、品位をおとし、信頼性をそこなうことになるからです……」と、学者らしい基本論をくり返し答えて、青年の質問に終止符を打たれようとした。しかし、先生の言葉は多くの支持者を得ている相手の感情を傷つけ

統計グラフ全国コンクール審査員 小野正明  
 (元総理府統計局グラフ担当課長補佐)

更にたかぶらせた結果になり、

「あなたには国民の感情がわからないのか。それではまるで外国人か傍観者の答えだ。同胞愛を逆なでするような論には絶対に承服できない。そうだろう諸君！」などと激越な言葉が彼の口からほとぼり、壇上で顔をこわばらせ、無言で立ち竦まれたように見える先生の近くまでこぶしを振り上げて歩みよる始末となり、彼を支持する数名の受講者たちまで席を離れて演壇の下までつめよって行く騒ぎになってしまった。予期しない事態の発生に、先生の背後に控えていた筆者等数名の講師達も無為無策で、ただオロオロして見まもるばかりで、億病な筆者など、仲裁役に立ちあがる自信のない臆甲斐なさを心中で嘆くのみだった。それは長く感じられる緊張した数分間だった。

しかし、やがて「とめ男」として当日の司会役だった後藤局長(前記)が、なお立ち続けている美濃部先生を抱えるように前に進み出て、「会場使用が時間切れになったから、本日はこれで終了にします！」と発言されたので、このハプニング劇は決着のないままで幕がおろされ、関係者一同はホッと胸をなでおろすのであった。先生の受けた衝撃が一番大きかったのだろう、控室に戻ってからも常日頃お見

せの「ミノベ・スマイル」は口辺から消え去り、筆者たちとも言葉も交されずに早々と姿を消されてしまった——。

あの時から20数年後の去る1月27日、同じ赤坂公会堂での指導者講習会(パネル・ディスカッションはその回かぎりで取り止め、講義と質疑応答だけになっている)が当時のあの熱気のひとつかけらも感じられないような平静さで終了してしまい、それは過ぎた日のあの情景を想起していた筆者には一沫のもの足りなささえ残るのであった。日没近く冷たい風の吹く地下鉄駅への帰路、スマートになった町並や人びとの姿を目にしながらか、「あれもこれも時代の変化さ」などと考えながら歩くうちに、不図、脳中をよぎることがあった。それは、かの日のハプニングの原因であり、双方とも自己の主張を最後まで曲げなかった「題名への主観的感情導入」の可否問題に対する筆者自身の結論(両者を納得させることができる)をまとめてみることに外ならなかった——。

【筆者後記】

20数年前の回想なので、記憶ちがいもあるとおもいますが、時間関係された方がおいでで、ご教示いただければ幸いです。

成果をあげた統計調査員研修会

県・県統計協会共催による昭和58年度統計調査員研修会は、好天に恵まれた5月26日～27日の両日、各市町村から調査員60名が参加し、先進市町村の視察として群馬

県沼田市役所及び新治村役場において実施しました。

沼田市役所及び新治村役場では、歓迎のあいさつのもと、統計担当職員の概況説明があり、活発な意見交換が行われました。参加された皆様の今後の調査業務のうえに参考になったことと思います。

この日は、群馬県の「猿ヶ京温泉」で一泊、懇親会は皆さん大変なごやかなふん困気のなかで、調査談義に花を咲かせていました。

翌日は、榛名神社、榛名湖を見学、帰路は新緑の山々を車窓に眺め、隣席同志で研修会の意義とこれからの抱負などについて語りあいながら、国道50号線を水戸へと向い、一同無事で有意義な研修を終えることができました。



歓迎のあいさつをされる沼田市青池助役

(統計課・統計指導グループ)

# 地域統計情報

## 日立市の産業

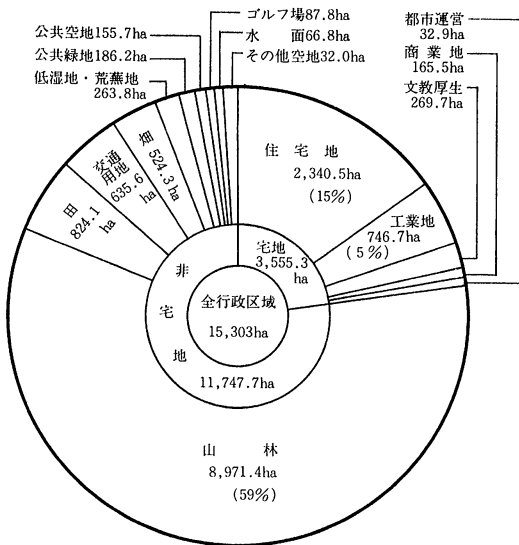
### 1. 地勢

日立市は、北緯36度30分、東経140度34分、茨城県の北東部に位置し、太平洋に面して南北25kmの海岸線を持ち、北東部に海拔500m前後の多賀山地に囲まれた都市である。

従って、市民の生活の舞台は多賀山地にそった細長い带状の市街地にある。

図一のとおり、山林が全体の約60%を占めており、工業地は約5%で工場はこの細長い地域に北から南へと伸びている。また、市の産業・経済・文化もこれらの地域を中心に集まっている。

図一 地勢現況

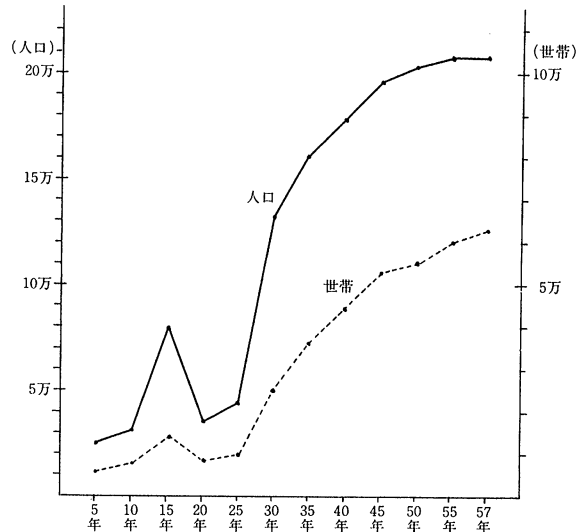


(注) 都市運営—市役所・出先官庁 郵便局・警察署 消防署等  
 文教厚生—学校・図書館・博物館 病院・老人ホーム  
 交通用地—道路用地・航路荷揚用地 鉄道用地  
 公共緑地—公園緑地・運動場 墓園等  
 公共空地—河川敷・水辺地 海浜地帯等  
 その他空地—未建築地・未利用地  
 (昭和55年日立市都市計画基礎調査)

### 2. 変せん

日立地方の産業は、日立鉱山の前身である赤沢銅山の開業そして明治38年日立鉱山が操業するに及んでその発展は顕著になった。さらに明治44年に日立鉱山から分離した日立製作所が、第1次大戦前後に大きく成長し、人口も増加

図二 人口と世帯の推移



の一途を辿ってきた。

このように、日立鉱山の開発とともに一寒村にすぎなかった現在の日立の都市化過程がはじまり、これを促進する大きな力となったのは、日立鉱山と日立製作所の成長である。

第2次世界大戦の激化に伴い、旧市内の工場、市街地の約70%は戦災で焼失し、人口も激減したが戦後復興の過程で、再び人口も増加した。特に昭和25年朝鮮特需を反映した電源開発事業等の好況に支えられて、日本鉱業、日立製作所の生産力の拡大は、市の発展に大きな影響を与えた。

日立市の発展過程は、日本鉱業、日立製作所とその系列企業並びにそれらの関連下請企業の集積という鉱工業の発展に依存していたことは疑う余地はないといえる。

### 3. 大企業と下請関連企業

市の産業構造は、大企業—系列企業—下請企業(1次下請, 2次下請)という階層構造をなしており、市内中小企業の取引先は、日立製作所またはその系列企業が圧倒的に多い。

また、市内の下請企業の団体である日立製作所工業協同組合及び日立鉄工協同組合に参加している企業について、従業員規模別構成をみると、30人~49人規模が全体の30%

以上で、これを含め100人以下の企業の累計は、約75%を占めており企業規模の零細性を示している。

これらは、傘下協力企業群としてそれぞれ大手工場別に組織化され、市内に協力工場として散在し、設備及び技術は大手工場により指導を受けながら、生産管理、製品検査等において水準を高めている。

#### 4. 産業の構造

##### (1)事業所数・従業者数

昭和56年の事業所統計調査によると、本市の事業所数は9,849であり、これに従事する者は107,276人である。昭和53年(前回調査)と比べると事業所で1,384(14.1%)、従業者で8,663人(8.9%)とそれぞれ増加している。

次に、図-3の産業別事業所数構成をみると、卸・小売業が4,867事業所で全体の49%(53年51%)とほぼ半数を占め、次にサービス業が23%(同23%)、製造業が13%(同13%)と昭和53年とほぼ同様である。

また、これらを構成比図-4でみると飲食店が1,448店舗となり全体の15%を占め最も多く、昭和53年に対し2,255店舗増加している。これは勤労者の多いまちの特徴をよく表わしている。

図-3 産業別事業所数の構成

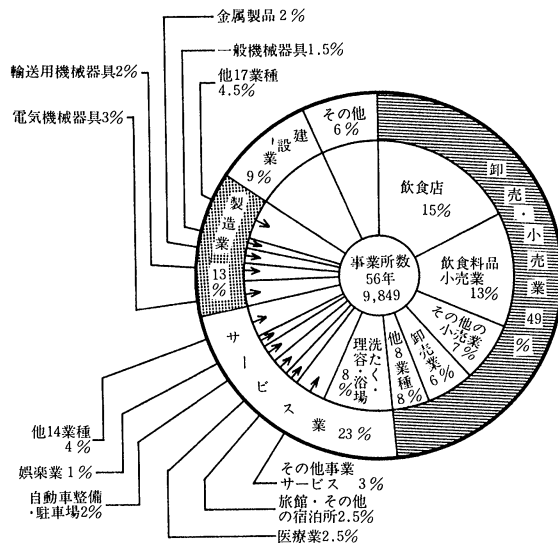
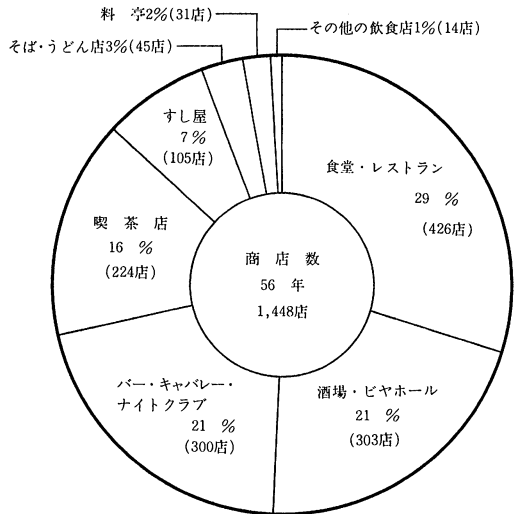


図-4 飲食店の業種別構成



一方、従業者数においては、製造業が42.8%(53年47.8%)、卸・小売業が20.6%(同19.1%)、サービス業が18.5%(同16.1%)となっている。

また、昭和56年の民営事業所の従業者規模別分布(表-1)をみると、1~4人規模のものが6,225事業所で最も多く、以下規模が大きくなるに従って減少し、300人以上の規模はわずか25事業所に過ぎない。

このように小規模事業所の占める割合は高く、30人未満は全体の95.1%に達し非常に多くなっている。

これに対して50人以上の事業所は262(28.1)と少ないの

表-1 民営規模別の事業所数・従業者数

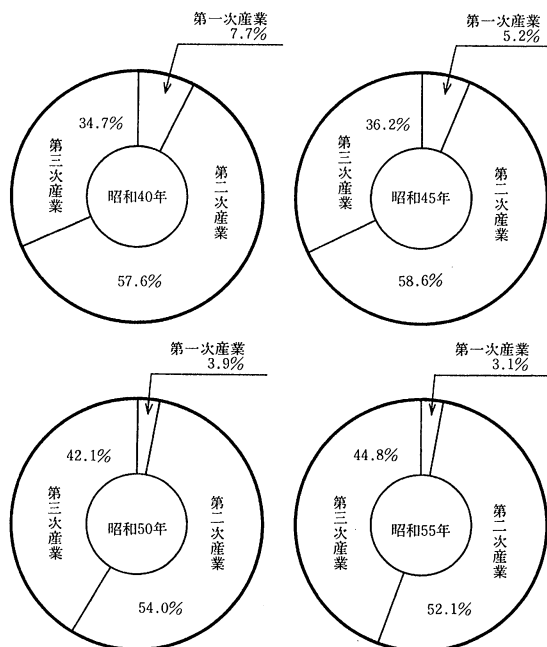
規模別	事業所		従業者	
	数	割合	数	割合
1 ~ 4	6,225	64.7%	13,583	13.3%
5 ~ 9	1,776	18.5	11,546	11.3
10 ~ 19	845	8.7	11,196	11.0
20 ~ 29	303	3.2	7,263	7.1
30 ~ 49	209	2.1	7,846	7.7
50 ~ 299	237	2.5	24,279	23.8
300人以上	25	0.3	26,239	25.8
合計	9,620	100.0	101,952	100.0

# 市町村だより

に対し、従業者数は全体の59.6%を占め、さらに300人以上の大規模事業所は事業所数が25(0.3%)と少ないにも拘らず従業員は全体の約半に達している。

## (2) 従業者人口

図一五



昭和55年の国勢調査による就業者は91,112人で、これを産業別にみると第1次産業は2,796人、第2次産業は47,510人、第3次産業は40,806人である。

これを、図一五の昭和40年(15年前)と比べると第1次産業は3,798人(4.6%)、第2次産業は1,555人(5.5%)とそれぞれ減少している。これに対し第3次産業は4,386人(3.7%)の大きな増加となっているのが特徴である。

## (3) 昼間流動人口

昭和55年の国勢調査による本市の流入人口は25,558人に達している。

これは、調査時における東海村の

人口の87%に相当し、流出人口は11,646人で十王町の人口に相当する。

また、表一2の流入人口のうち特に多いのは、北茨城市3,772人(14.7%)、高萩市3,489人(13.6%)、常陸太田市3,100人(12.1%)、勝田市2,805人(10.9%)、東海村2,763人(10.8%)、十王町2,417(9.4%)、水戸市2,088人(8.1%)が主なもので全体の80%を占めている。

これに対し流出人口の多いのは、水戸市3,237人、勝田市2,603人、高萩市1,325人、東海村1,064人となっている。

## 5. 工業の推移

本市における経済活動は、何といても鉱工業が中心であり、市の発展を支えてきた。

昭和56年の工業統計調査によると工業数は1,211事業所、従業者数は43,626人、製造品出荷額は10,793億円となっている。

これを茨城県の比率で見ると事業所数で8.4%であるが、従業者数では15.1%、製造品出荷額で15.9%とそれぞれ県全体の約6分の1を本市で占めている。

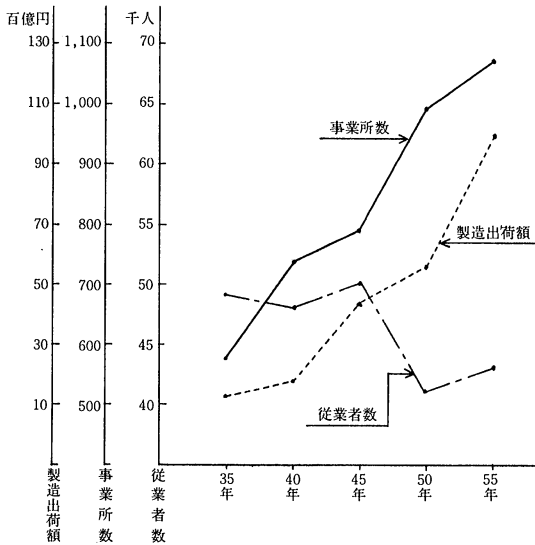
次に、図一六にあるように出荷額は昭和35年~40年までは横ばい状況にあったが、昭和40年代に入ってから増加をはじめ、特に昭和50年からは急激な増加となっている。

これに対し、従業者は昭和45年まではわずかながら増加をしていたが、昭和46年ごろから急激に減少してきた。これは、省力化・機械化等の労働節約的投資と大手工場における体質改善によるものと思われる。

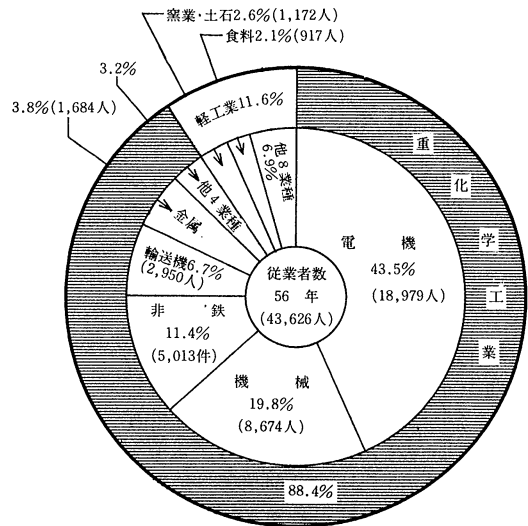
表一2 夜間・昼間の人口

区分	常住(夜間)人口	流入人口	流出人口	流入超過人口	昼間人口
就業者	82,988	22,131	8,124	14,007	96,995
通学者	40,315	3,427	3,522	△ 95	40,220
その他	69,647	—	—	—	69,647
合計	204,596	25,558	11,646	13,912	218,508
55年増加率(50年対比)	%	%	%	%	%
50年増加率(45年対比)	1.1	16.3	24.8	10.1	1.5
45年増加率(40年対比)	4.7	5.9	10.3	3.0	4.6
	7.5	18.1	37.5	7.8	7.5

図一六 工業の推移



図一八 産業別(工場)従業者の構成



さて、本市における産業別工場数を図一七でみると重化学工業が69.6%で、このうち電機・機械の製造部門で35.4%と約3分の1を占めておりその割合は非常に大きい。

また、図一八の従業者構成をみても重化学工業が88.4%を占め、軽工業はわずか11.6%に過ぎない。さらに前者のうち電機・機械部門だけで全体の従業者の6割強を占め、

ここに本市の特徴をみる事ができる。

## 6. おわりに

以上日立市の産業、特に工業を中心に各種統計調査の結果等から紹介したが、十分な分析もできないまま終わってしまった。

統計資料が政策の決定あるいは企業経営の指標として重要なものであることはいうまでもない。折角苦労して調査した結果が、図書室に「ねむるデータ」となってしまうようなその活用のための分析、あるいは貴重なデータの市民への還元を検討しなければならない。

(日立市庶務課長・吉成保寿)

図一七 産業別工場数の構成

